

なぜ京都と丹波、摂津に妻入り型式の草葺き民家が多いのか —摂丹型民家の基礎研究(1)・破風考—

山崎 敏昭 (ひとはく地域研究員)

1. はじめに

兵庫県立人と自然の博物館(ひとはく)の所在する三田市周辺には、兵庫県阪神・丹波地域と大坂府能勢地域、京都府山城北部地域と京丹波地域(近世の旧摂津国西部から丹波国・一部は山城国)にのみ分布する、摂丹型民家(せったんがたみんか)と呼ばれる特徴的な伝統的農家の類型が認められます。今回は、摂丹型民家の分布圏における現地調査と過去に記録された事例をもとに、同型式民家の特徴について考えてみます。

2. 摂丹型民家の特徴

民家は、入り口が棟通りのどちらにあるかによっても異なる名称で呼ばれます。入り口を棟と平行に設ける形式は、平入(ひらいり)と呼ばれます。一方、棟と直交する側に入り口を設ける形式は、棟木の端を妻(つま)と呼びますが、そのせいかからか、妻入り(つまいり)と呼ばれます。

摂丹型民家は、棟と直交する屋根の三角の側に入り口がありますから、妻入り形式となります。ただし、妻入り形式の民家は、近畿地方の北部や南部にみられるほかの民家類型(北山型、北船井型、余呉型、滝畑型等)にもありますので、内部の間取りを付け加えて区別します。

ほかの民家類型の間取りでは、戸口を入りますと、全面に土間が広がっていますが、摂丹型民家では土間は棟通りの片側だけにあり、奥へとうなぎの寝床のように伸びます。

これらの特徴をまとめると、摂丹型民家の特徴は、「縦割りの妻入り片土間式(つまいりかたどましき)」の民家となります。

また、屋根の妻側の三角形の部分、通常は穴が開いていて、煙り抜きなどになっていますが、摂丹型民家の場合は、その部分に破風(はふ)と呼ばれる妻飾りを付加します。家屋の妻側を正面にし



図1 摂丹型民家の分布域と周辺の民家型式

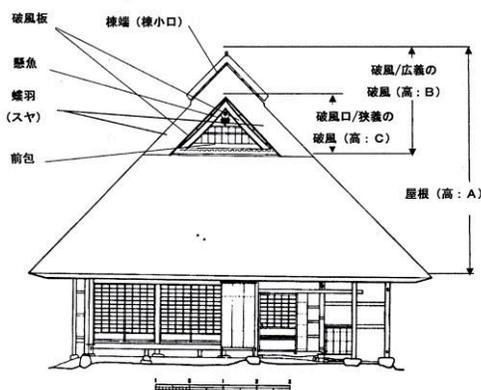


図2 摂丹型民家の屋根の名称

(京都府綾部市旧岡花家住宅※国指定重要文化財)



図3 標準的な摂丹型民家の正面(妻側)の破風

(宝塚市旧東家住宅※県指定文化財)

て、破風を付け、縁側と座敷を設けるあり方は、家屋の正面性を強調したものとされています。

ほかの近畿地方の妻入り型式の民家でないこうした正面性の強調といった特徴からは、「広縁と接客空間を重視する前座敷型の内部構成があり、破風を前面にした妻入形式の系譜は、中世の国人層の破風をもつ館を範とした格式を重視したもの（永井規男 1977）」と推論されています。

3. 撰丹型民家の特質を探る

このように撰丹型民家型は、格式をもつ民家であるから、屋根の破風などを正面にすえて強調する「妻入り」の型式をとると紹介されています。けれども、同民家の分布圏における事例を細かく見て行きますと、地域によっては破風が強調されているとは言い難いことがわかります。



図4 各地の撰丹型民家の屋根と破風の大きさ

4. 撰丹型民家の破風の地域毎の分析

撰丹型民家の調査記録の事例をもとに屋根における破風の比率を分析すると、破風の強調が著しい地域は、京都府丹波地域であり、次いで大阪府能勢地域でした。兵庫県域は、総じて強調の度合いは低い地域でした。撰丹型民家の破風の強調は、京都丹波地域の特徴であったことをうかがわせます。

5. まとめ：撰丹型民家はなぜ妻入りなのか

撰丹型民家の破風の扱いの違いは、都に近い京都丹波においては格式にまつわる破風等の生活文化を重んじており、都から離れた場所の大阪や兵庫は、形を模倣しただけとなったためと解釈することができます。そうすると、京都府の撰丹型民家は古く、兵庫の撰丹型民家は新しいものとなる可能性があります。過去の調査事例を紐解いてみても、各地域の最古とされる事例は、いずれも江戸時代初期のものであり、時期的な差はありません。年代が正しいとすると、この民家型式の成立当初から破風の扱いに地域差があったといえます。

破風や座敷、広縁といった家の格式をあらわす正面性を強調するために、妻入り形式となったと解釈されている撰丹型民家。謎は深まるばかりです。

文献：山崎敏昭・黒田龍二 2014.06 「撰丹型民家における破風考」

『2014年度日本建築学会近畿支部研究発表会要旨』

山崎敏昭 2016.06 「撰丹型民家の分布圏における破風の大きさ—撰丹型民家における破風考 2—」

『2016年度日本建築学会近畿支部研究発表会要旨』